

土器と石棺

——インドネシア短期調査ノート——

坂井 隆

I. はじめに

本稿は、1985年8月25日より9月14日まで行ったインドネシアでの短期調査において収集した資料に関するノートである。筆者の研究課題は、インドネシアと日本の先史時代・古代の墓制・祭祀遺跡の比較検討であるが、相対的な時代観をつきあわせるために、土器が大きな役割を果たすことは、少くとも日本の考古学研究者にとっては基礎的な方法論であり、今回の短期調査は主にインドネシアの先史時代の代表的な土器群を実見することを第一の目的とした。

インドネシアの考古学界では、土器自体の研究は過去10年間で開花を始め、最近では何人かの若手の研究者たちが、本格的な土器研究を進めてきている。⁽¹⁾ しかしいまだ土器をもってインドネシア全土の時間軸としていくには、調査例そのものが少く、研究史も若い。とりわけ外国人研究者にとっては、正確な実測図が少いために、土器認識とその背後にある遺跡・文化への判断を留保せざるをえないことも、ないわけではなかった。

そこで今回の短期調査では、オランダ植民地時代調査の遺物を中心に収蔵するジャカルタ国立博物館 Musium Nasional と、独立後のインドネシア人研究者の調査遺物を収蔵する国立考古学研究センター Pusat Penelitian Arkeologi Nasional の代表的な遺物を実見した。当初、実測図を作製することを意図したが、時間の都合でスケッチ図となった。以下それらの土器の紹介と共に、併せていくつかの埋葬遺跡と現代の土器製作の一例を簡単に報告したい。



ジャカルタ国立博物館



インドネシア国立考古学研究センター

(1) インドネシアの土器研究史は、筆者が簡単に紹介したことがある。(坂井 隆 1984) 最近の土器研究の全体を知るには、1979年のジャカルタでの土器・陶磁器セミナーの報告 (PPAN 1984) が英文でまとめられている。また Santoso S. や Goenadi N.などの土器研究は、1982年のインドネシア考古学研究セミナーの報告 (PPAN 1983) に収録されている。



第1図 遺跡分布図

- | | | |
|----------------------|------------|-------------|
| 1. ティビンティンギ | A. スマトラ島 | O. パレムバン |
| 2. カルムパン | B. ジャワ島 | P. ポンティアナ |
| 3. パンカジュネ | C. バリ島 | Q. バンジャルマシン |
| 4. リアン・ブア | D. ロムボッ島 | R. メナド |
| 5. ムロロ | E. スムバワ島 | S. ウジュンパンダン |
| 6. アニヤル | F. フローレス島 | T. ジャカルタ |
| 7. ブニ文化各遺跡 | G. スムバ島 | U. バンドゥン |
| 8. サダン・グントン | H. ティモール島 | V. スマラン |
| 9. チバリ | I. カリマンタン島 | W. ジョクジャカルタ |
| 10. プラワンガン トウルジヤン | J. スラウェシ島 | X. スラバヤ |
| 11. ギリマヌッ | K. ハルマヘラ島 | Y. デンパサル |
| 12. モジョクルト | L. スラム島 | Z. ブランタス川 |
| 13. クディリ | M. イリアン島 | |
| 14. ブリタル | N. メダン | |

II. 先史時代の土器 附 石棺

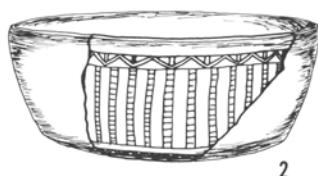
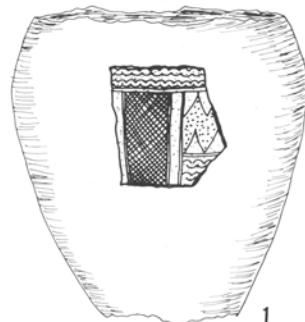
A. カルムパン土器文化 (第2図)

カルムパン Kalumpang 土器文化は、スラウェシ Sulawesi 島南部内陸のカルムパン遺跡周辺で発見された土器群で、同遺跡発見遺物は大きく新石器時代に属するものと、初期金属器時代に含まれるものとの二群に分けられる、と言われている。⁽²⁾

カルムパン遺跡出土のものは、図2の1～4の4点である。1は、推定径25cmほどの壺状の土器の胴部片で、砂粒を多く含み、軟質の酸化炎焼成である。半截竹管文及びヘラ描沈線・刺突文により文様構成されている。2は、推定径25cmほどの大形の椀の口縁・体部片で、砂粒は少く、やや硬質の中性～還元炎焼成である。ヘラ描沈線文による鋸歯文水平帯を上下に持ち、その中間に梯子形文が並ぶ。この梯子形文の間は、研磨されていて、部分的に赤色塗彩痕がある。3は、顯著な稜をもって「く」字形に屈曲する壺状土器の胴部片で、砂粒少く、中性～還元炎焼成である。ヘラ描沈線文により、鋸歯文帯及び雷文状の鍵形文で構成され、無文部分は研磨されている。4は、同程度の大きさの壺状土器の胴部上半で、砂粒少く、中性～還元炎焼成である。ヘラ描沈線文と刺突文によって施文され、赤色塗彩痕が残り、下半にはヘラナデ痕が見られる。

1が新石器時代のもので、2～4が初期金属器時代のものと思われる。

5・6は、同じスラウェシ南部のパンカジュネ Pangkajene の出土の土器で、共に酸化炎焼成で、丁寧に研磨されて、薄く赤色塗彩がなされている。カルムパンとは約150km離れており、両者は直接の関係はないであろう。

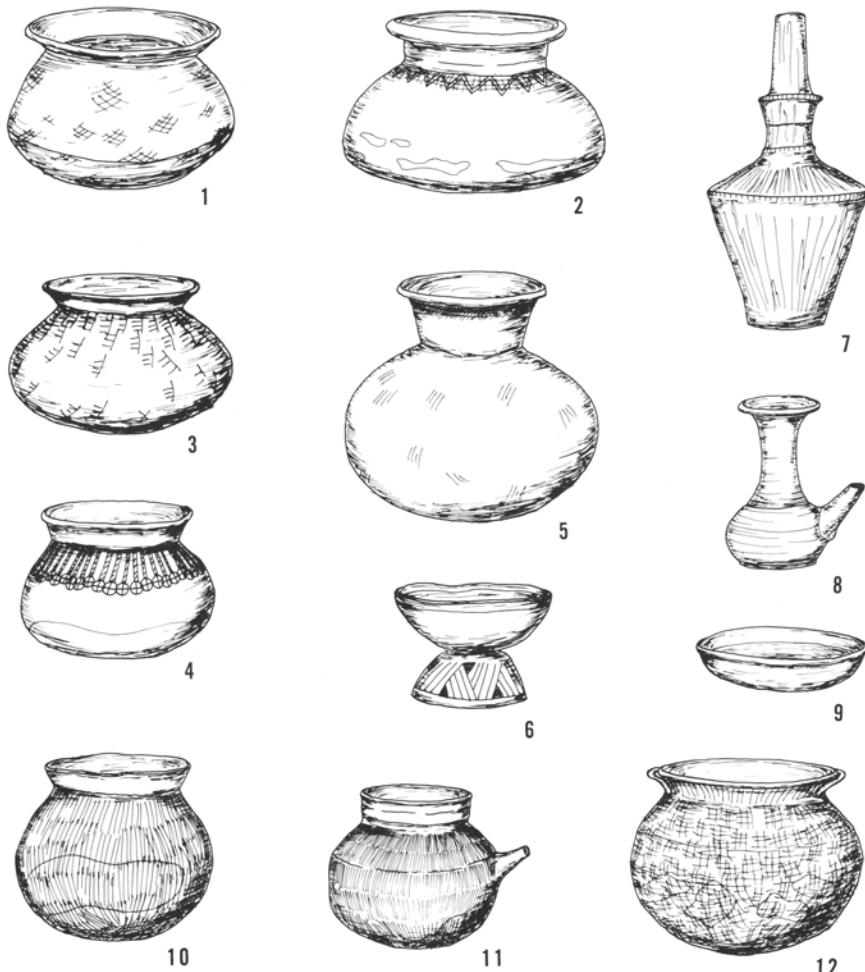


第2図 カルムパンとパンカジュネの土器

(2) Van Heekeren 1972 及び Soejono 1984。なお新石器時代との同定は、共伴遺物である方角斧と太形ハマグリ刃形磨製石斧（共にインドネシア新石器時代の示標遺物）によっているが、絶対年代は、AD 10～14世紀頃と考えられている。これは、スラウェシ南部内陸部が外の文化との交流が少いわゆる文化遺存地域であるためとされている。

B. ブニ土器文化（第3図）

ブニ Buni 土器文化は、ジャワ Jawa 島西部の北海岸平野地方の各地で発見された叩キ成形を基調とする土器文化である。初期金属器時代に東南アジア全域に影響を及したとされるサフィン・カラナイ Sa-huynh・Kalanay 土器文化とバウ・マレー Bau・Malay 土器文化の両者の様相が見られる、⁽³⁾とされている。しかしここに含まれる土器群は、現在のところ多くが各地の盗掘品であって、必ずしもこの土器文化の内容は明確ではない。ジャカルタ国立博物館の収蔵品には、これらブニのものに似たジャワ島東部のプランタス Brantas 川流域出土のものもあり、併せて紹介したい。



第3図 ブニと東部ジャワの叩キ土器 S = 1 / 6

(3) ブニ土器文化の直接の報告としては、Soejono 1962 と Sutayasa 1972 がある。知られている遺跡は10か所以上になるが、曲りなりに試掘がなされたのは、示標遺跡のブニ遺跡だけであり、しかもそれさえも盗掘による攪乱のため層位的な把握がなされていない。ソールヘイム Solheim の提唱する両文化との関連は、Soejono 1984 などで触れられている。

1は、推径20cmほどの甕形土器で、胴～底部は格子状文叩キ具で成形された後、ナデ調整されている。中性・還元炎焼成で、胴部に2次焼成痕が見られる。2は、推径20cm強の壺形土器で、胴部はやはり格子状文叩キ具成形後、ナデ調整されている。肩部にはヘラ描沈線による二重鋸歯文がまわり、頸部に輪積痕が残る。胴下半には2次焼成痕がある。中性・還元炎焼成である。3は、推径20cm弱の甕形土器で、櫛歯状文叩キ具成形の後、ナデ調整される。中性・還元炎焼成である。4は、推径15cm強の甕形土器で、やや粗い胎土を用い、肩部には特徴的なスタンプ文がめぐっている。ナデ調整される以前の成形痕は、不明瞭である。器壁はやや厚く、中性・還元炎焼成だが、胴下半に2次焼成痕があり、また全体に鉄分の沈着が見られる。5は、推径20cmほどの壺形土器で、櫛歯状文叩キ具成形の後、やや緻密なナデ調整を行う。頸部上半は、斜め後横方向のハケメ調整がなされている。器表全体に薄い赤色塗彩痕が残るが、もともと酸化炎焼成であるため、あまりはつきりしない。6は、推径15cm弱の高坏形土器で、口縁の歪み大きく全体に粗製である。坏部は粗いナデ調整で、脚部には、面違ひ三角形透しに平行するヘラ描沈線の斜線文がまわる。中性・還元炎焼成だが、温度はかなり低いと思われる。7は、推定15cm弱の平底の壺形土器で、顕著な稜を持つ特徴的な器形である。頸・肩部の各稜にはキザミがあり、肩部にはヘラ描沈線の浅い放射状文が見られる。全体に縦方向にやや粗い研磨調整を施しており、中性・還元炎焼成である。器形からは、回転台による成形と研磨前の調整が想定される。

8は、推高15cm弱の水注形土器で、頸部は回転ヘラ研磨、胴部は回転ナデ調整であり、底部には、回転ヘラ切り痕が見られる。酸化炎焼成だが部分的に赤色塗彩痕がある。9は、推径15cm弱の坏形土器で、体部は内外面ナデ調整、底部外縁は回転ヘラ削り調整である。焼成は、酸化炎。

以上1～9は、ジャワ島西部北海岸各地の出土だが、10～12は、ジャワ島東部内陸のプランタス川流域平野の出土である。10は、推径15cm強で、胴部全面に縦方向の櫛歯状文叩キ具成形痕が、明瞭に残る。調整痕はなく、中性・還元炎焼成で、胴部中位に2次焼成痕が見られる。11は、推高約12cmの注口付甕形土器で、輪積み成形の後、胴部は縦方向のハケメ調整がなされている。中性・還元炎焼成で、底部には2次焼成痕がある。12は、推径20cm弱の把手付甕形土器で、胴・底部は輪積みの後格子状文叩キ具成形、口縁部は縦方向ハケメ調整である。中性・還元炎焼成で、胸部下位には2次焼成痕が見られる。

これらのうち8は明らかにロクロ使用であり、同一地点出土の9と共にブニ土器文化とは、切り離したい。1～4の煮沸器で共通するのは、叩キ成形後ナデ調整を施すことであり、中性～還元炎焼成で丸底の器形を持つことである。同様の煮沸器の10～12は、器形・焼成はそれらに似るが、ナデ調整のないことが異なる。5は、焼成が異なるが、成形・調整は以上の煮沸器と同じ技法である。⁽⁴⁾ 7は叩キの要素が全く見られないが、用途の差か文化の差かは判別し難い。

(4) Soejono 1984では、ブニ土器文化に属する土器を、9割を占める灰色土器群と1割の赤色土器群とに分けており、5は後者の代表とされている。しかし筆者の観察では、技法的には7がより異質である。いづれにしても出土状況が曖昧であるため、ブニ土器文化の理解そのものが判然としていない。なお6の坏部だけを切り離した坏形土器がある。

C. ギリマヌッ土器文化（第4図）

ギリマヌッ Gilimanuk 土器文化は、バリ島西端の初期金属器時代の複合埋葬遺跡である同遺跡より発見された副葬品の土器群である。⁽⁵⁾ 分布は、現在まで同遺跡周辺の海岸部に限られている。

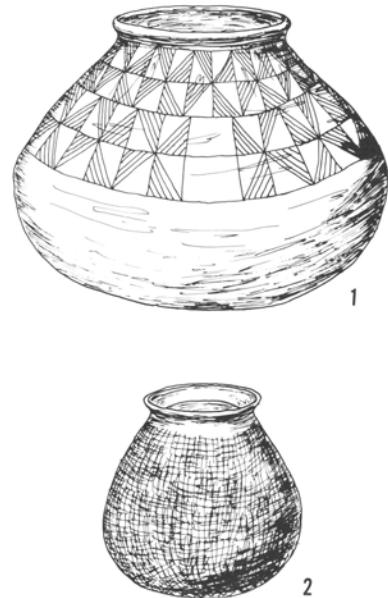
1は、推径30cmの大形の壺形土器である。成形技法は不明だが、球形状の胴～底部全体は研磨調整され、さらに赤色塗彩がなされている。また胴部上半は、特徴的なヘラ描沈線による2段の文様帯がめぐっている。長方形を対角線と各辺の中分線により8分割してできた三角形群のうち対称位置にあるものを平行斜線文でうめている。2は、推径15cm強の甕形土器で、小ぶりの口縁はかなり外傾している。胴部以下は、格子状文叩キ具成形痕をはっきり残しており、頸部外面には、ヘラアテ調整痕が見られる。焼成は、あまり高温ではない酸化～中性炎による。

1の文様そのものは、直接他に類例が不明だが、サフィン・カラナイ土器文化に見られる平行斜線文でうめられた鋸歯文の流れを引くものだろう。2の成形・調整技法は、東部ジャワの叩キ成形土器と共にものがある。（第3図—12参照）

D. ムロロ遺跡の土器（第5図）

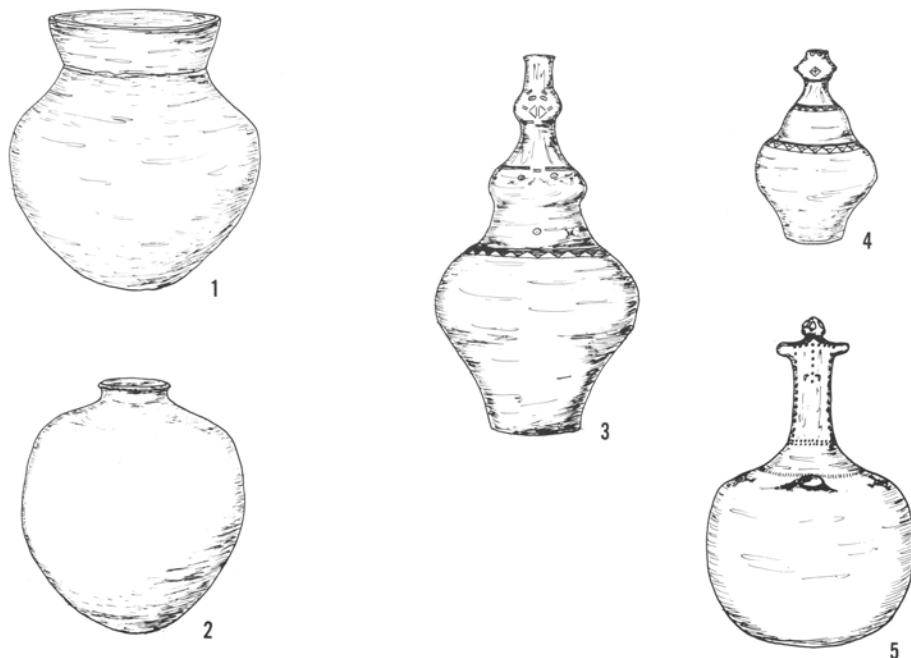
ムロロ Melolo 遺跡は、ヌサトゥンガラ Nusatenggara(小スンダ)列島東部のスムバ Sumba 島の海岸に位置する2次埋葬の大甕棺墓群遺跡である。副葬品に金属器が見られないため新石器時代に含める説と、土器の様相より初期金属器時代まで下げる説との、二つの時代観がある。⁽⁶⁾

1は、推径40cmの大形の甕形土器で、僅かに内反ぎみの大きな口縁部に器形的な特徴がある。成形技法は不明だが、頸部には接合痕があり、口縁内外面と胴～底部全面を研磨調整し赤色塗彩を施している。酸化炎焼成である。2は、推径35cm強の短頸の壺形土器で、胴部に比して口縁・頸部がかなり小さい。成形技法はやはり観察できなかったが、胴部外面には部分的にケズリ状の調整痕が見られる。そしてやや不明瞭な研磨痕があり、黒色塗彩のように見られる。焼成は、酸化炎によっている。3は、推径15cm強の壺形胴部で、頸部は2段の顕著な膨らみ部を有し、底部は平底である。成形技法は、明確な痕跡は確認できなかったが、器形より回転台の使用が考えら



第4図 ギリマヌッの土器 S=1/6

(5) ギリマヌッ遺跡は、1963年から79年までは5回の発掘調査がなされている。総合的な報告はまだないが、第1次の概要是 Soejono 1963に記され、1977年までの写真報告に Soejono 1977 がある。後者では実年代を西暦紀元直後と記している。出土土器の器形分類については、Santoso 1984でなされているが、残念ながら実測図を欠いている。



第5図 ムロロ遺跡出土の土器 1・2 S = 1/12 3~5 S = 1/6

れる。胴部中位から上は極めて緻密な研磨がなされて光沢をおびている。さらに頸～肩部にかけては、ヘラ描沈線の後白土を埋めて、線描による描象的な女性上半像と鋸歯文帯が描かれている。焼成は酸火炎で、胴部下位に黒斑が見られる。4は、推径10cmの小肩の壺形土器で、口縁部は欠損するが、頸部に2段の膨らみ部を有し、基本的に3を小形化した器形を示している。ただし上位の膨らみ部には、耳を現わすと思われる突起部が一対見られる。また口を表現する部分も突出している。成形は3と同様と考えられるが、研磨調整はやや粗く、全体に黒色塗彩がなされている。3と基本的に同じ画像のヘラ描沈線・白土充填による女性像表現がなされているが、首以下は3条の鋸歯文帯に変わっている。酸化炎焼成である。5は、胴径19cm・器高25cmの異形の水注形土器で、肩部に注口部を有する。肩部より上は、偏平な垂直突起のような形状を示し、両手を括げた人間の上半身を描象化した造形になっている。この部分は、口縁・頸部ではなく把手のようなものであり、この土器は注口部以外に内容物の出入口がない。成形技法は不明で、全体に緻密な研磨と黒色塗彩を施し光沢がある。把手部と肩部には刺突文とヘラ描沈線による櫛歯文と菱形状文があり共に白土を充填している。酸化炎焼成である。

1・2は、甕棺外容器で、3～5は明器的な意味を強く持つ副葬器である。

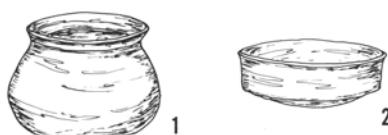
(6) ムロロ遺跡の調査報告としては、Heekeren 1956があるが、Heekeren 1972の中でもかなり細かく触れられている。これらの中で Heekeren は、新石器時代説を述べている。一方初期金属器時代説は、Soejono 1984などに記されている。しかしいずれも、土器についてそれほど十分には検討しつくされていない。1978年に Soejono は再発掘をしている。(報告書未刊)

E. アニヤル遺跡の土器（第6図）

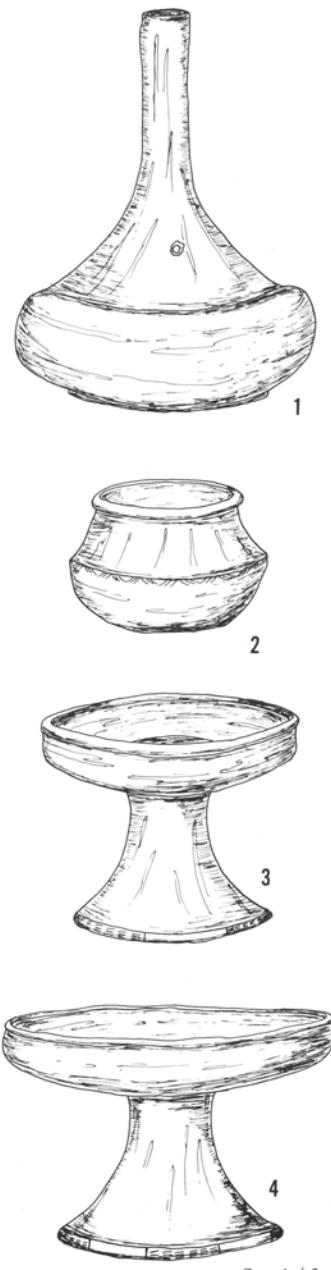
アニヤル Anyar 遺跡は、ジャワ島西端のスンダ Sunda 海峡に面する海岸に位置する初期金属器時代の複合埋葬遺跡である。⁽⁷⁾ここで紹介するのは、同遺跡の1979年の調査で検出された甕棺墓からの一括資料である。

1は、推径25cm弱の壺形土器で、細い筒状の口縁・頸部と低位置で幅広の胴部そして低い高台を有する。胴部と口縁・頸部の境には内稜が見られるが、ここが両者の接合箇所であろう。高台は貼り付け高台で、回転ヘラ調整痕が認められる。全体に研磨調整後黒色塗彩がなされているが、器形から見てその前に回転調整が行われたと思われる。酸化～中性炎焼成だが、頸部には径1cmほどの焼成後の穿孔がある。2は、推径15cm強の平底の小形の甕形土器である。中位に、頸部と胴部を分かつ明瞭な稜がある。底部と底部外縁には回転ヘラ削りによる調整痕があり、成形も回転台が使われた可能性がある。頸部・胴部には粗い研磨痕があり、内稜の下には、ヘラ描沈線による平行斜線文がある。酸化～中性炎焼成である。3・4は、ほぼ同一器形の高壺形土器で、推径は3が20cm、4が25cm強である。口縁にやや歪みがあり、壺部と脚部の接合にはヘソ状突起がない。全面研磨調整しており、脚部端部にはヘラ描沈線文がある。酸化～中性炎焼成で黒斑がある。

以上4点とも、回転台使用による精緻な作りである。



第7図 プラワンガン遺跡出土の土器 S = 1 / 6



第6図 アニヤル遺跡出土の土器

(7) アニヤル遺跡は、1955年に Heekeran によって調査されているが、その時点での時代観は新石器時代であった。しかし79年の調査(Haris 1982)によって青銅剣がここで紹介した土器と共に甕棺より発見されたため、少くとも甕棺墓については、時代観は訂正された。79年の調査については、筆者は概要を紹介したことがある。(坂井 1985a)

F. プラワンガン遺跡出土土器

(第7図) とトゥルジャン遺跡

プラワンガン Plawangan 遺跡

とトゥルジャン Terjan 遺跡は、

中部ジャワ東部のジャワ海沿岸に

⁽⁸⁾位置する。ここでは、プラワンガン

出土土器 2 点を紹介すると共に、

トゥルジャン遺跡踏査の印象

を簡単に記したい。

1 は、推径10cm強の小形甕形土器で、口縁内面に輪積痕が見られるため、全体の成形も輪積の可能性がある。外面は研磨調整で、酸化炎焼成による。2 は、推径10cm 強の壺形土器で、丸底。ヘラ削り成形後、全面研磨して黒色塗彩がなされる。酸化炎焼成である。

トゥルジャン遺跡は、海岸のプラワンガンから 5 kmほど内陸へ入った丘の上にある。トゥルジャンからプラワンガンの海岸は遠望できる。遺跡は、丘の頂部端に位置しており眺望は極めて良い。配石墓そのものの規模はそれほど大きくないが、平坦部の外縁には低い石壙があり、斜面にはメンヒル状の石がいくつか見られる。報告によれば、配石の上に木造の覆屋があったとされるが、周辺の低地から仰ぐこの墓の被葬者の呪術的性格が強く想定できる印象があった。



トゥルジャン遺跡より臨むプラワンガン遺跡



トゥルジャン遺跡：中央の尾根の傾斜変換点に位置



同上：配石の内側に墓壙がある。四隅の石は獸面石像

(8) プラワンガンの土器は、他に押型文や沈線文により施文された破片が多くある。(Haris 1981) また Santoso 1983 は、成形技法より 3種に分類している。筆者は、両遺跡の調査概要を紹介したことがある。(坂井 1985a)

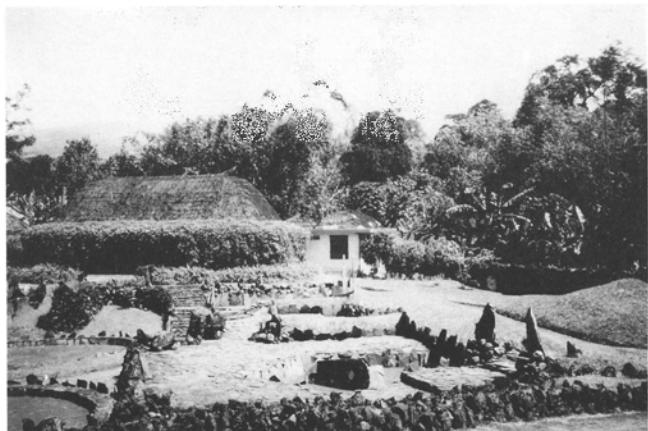
G. チパリ遺跡と出土土器（第8図）

チパリ Cipari 遺跡は、西部ジャワ東端のジャワ海沿岸のチルメイ Cirumei 山山麓に位置する初期金属器時代の箱式石棺群である。⁽⁹⁾

チルメイ山の山麓のクニンガン Kuningan 地方には、他にも数か所の箱式石棺の遺跡が存在するが、チパリ遺跡は 2 基の箱式石棺が整備され、傍らには出土遺物を陳列した資料館もあり、インドネシアの先史時代の遺跡では極めて珍しい存在である。

検出された 2 基の箱式石棺は、薄い板石 6 枚で構成される構造を持ち、共にチルメイの山頂に対し長軸が直交する位置にある。

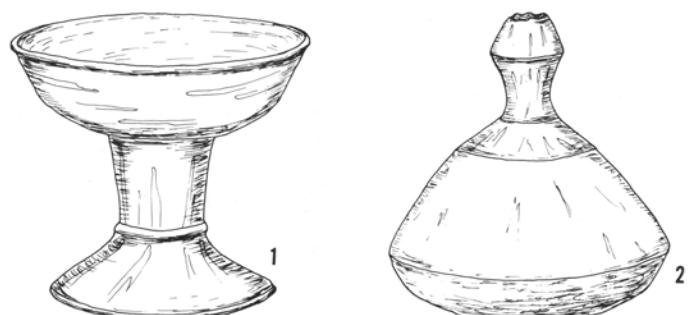
1 は、推径 15cm 弱の高壺形土器で、脚部に貼付け凸帯を有する。全体に磨耗が激しいが、研磨されており、酸化炎焼成。2 は、推径 20cm 強の壺形土器で、細い頸部と下方に最大径を持つ特徴的な器形である。赤色塗彩がなされ、酸化炎焼成である。他に大形の壺、小形の台付甕・甕状の器種がある。



チパリ遺跡公園と資料館。後の山がチルメイ山。



チパリ遺跡の箱式石棺。土台と周囲の壁は保存用施設



第 8 図 チパリ遺跡出土の土器 S = 1 / 6

(9) ここで紹介した土器は、小形青銅斧と共に箱式石棺の棺内からではなく、周囲から検出されたものである。そのため調査した Teguh は、厳密には新石器時代と初期金属器時代の変化の時期との時代観を示している。(Teguh 1982) なおこの遺跡公園については、韓国の巨石文化研究者金秉模の詳しい探訪記がある。(金秉模 1980)

H. ティビンティンギとrian・ブア出土土器（第9図）

ティビンティンギ Tebing Tinggi は、スマトラ Sumatera 南部の内陸部で、1はそこからの出土だが、詳細は不明である⁽¹⁰⁾。推径10cm強の小形の壺形土器で、丸底ぎみの平底で肩部に段を持つ。肩部上下は接合されているはずだが痕跡は無く、全面を緻密に研磨し赤色塗彩する。ヘラ描沈線・白土充填の文様帶が口縁と肩部にあり、それぞれ櫛歯文と雷文状の文様が主文で、横位破線文を配する。酸化炎焼成で黒斑がある。



1

rian・ブア Liang Bua 遺跡は、フローレス Flores 島西部の初期金属器時代の洞窟埋葬遺跡である。⁽¹¹⁾ 2は、推径20cm弱の長頸の壺形土器で、顕著な稜をもって分けられる体部下位は、半球形状を呈する。長頸部と体部の境には接合痕があり、体部の稜を考えると、三部分に分けての成形や部分的な回転台使用も想定できる。全面研磨調整がなされ、特に体部上位は放射状の暗文ぎみになる。黒色塗彩を施しているが、焼成は酸化炎によっている。



2

第9図 ティビンティンギと
rian・ブア出土の土器 S=1/6

観察土器一覧

| | カルムパン | | パンカ ジュネ | ブニ | 西部ジ ヤワ | 東部ジ ヤワ | ギリマ ヌッ | ムロロ ル | アニヤ ル | プラワ ンガン | チバリ | T.テ インギ | rian・ブア |
|----------|--------------|-----------|------------|----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|------------|-----------|
| | 新石器 | 金属器 | | | | | | | | | | | |
| 成形 | ? | ? | 回転台 | 叩キ | ロクロ | 叩キ | 叩キ | 回転台 | 回転台 | 輪積 | ? | 回転台 | 回転台 |
| 調整 | ? | 研磨 赤塗彩 | 研磨 赤塗彩 | ナデ | 研磨 赤塗彩 | ハケメ | 研磨 赤塗彩 | 研磨黒 赤塗彩 | 研磨黒 赤塗彩 | 研磨 黒塗彩 | 研磨 赤塗彩 | 研磨 赤塗彩 | 研磨 黒塗彩 |
| 施文 方法 | 竹管・沈 線・刺突 | 沈線刺 突 | なし | スタン ブ | なし | なし | 沈線 | 沈線白 土 | 沈線白 土 | なし | なし | 沈線白 土 | なし |
| 焼成 | 酸化 軟質 | 中性還 元 | 酸化 | 中性還 元 | 酸化 | 中性還 元 | 酸化中 性 | 酸化中 性 | 酸化黑 斑 | 酸化 | 酸化 | 酸化黑 斑 | 酸化 |
| 器種 | ? | 壺・ 塊? | 壺・ 塊? | 壺・ 塊 | 壺・ 塊 | 水注・ 塊 | 襄 | 壺・ 襄 | 壺・ 襄 | 雍・杯 | 高坏・ 壺 | 壺 | 壺 |
| 備考 | 砂粒多 | | | | 8・9 | | 金属器 | 襄棺 | 金属器 | 有文片 | 金属器 | | 金属器 |

I. 舟形石棺

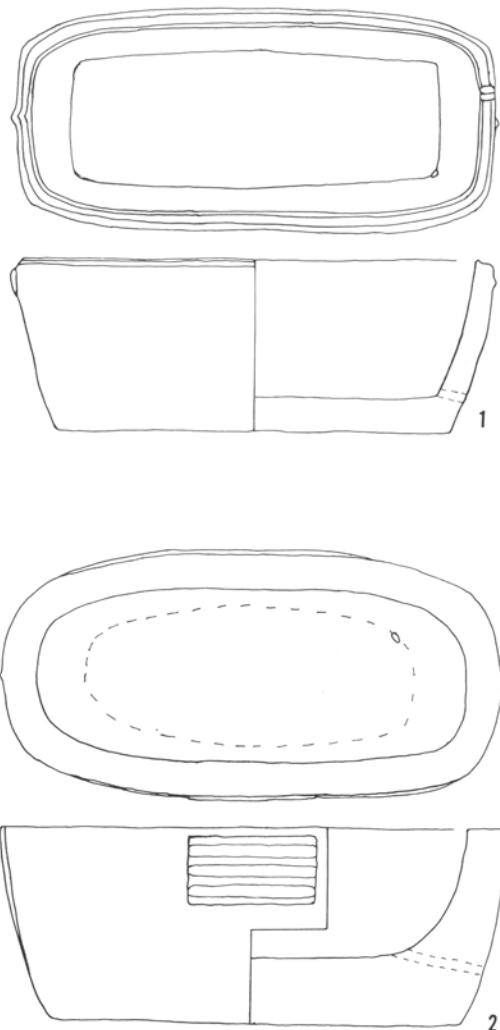
インドネシアの初期金属器時代の巨石文化との関係で述べられる広義の舟形石棺には、パリと東部ジャワのブスキ Besuki 地方で発見されているパリ・ブスキ式と南部スマトラのパセマ Pasema 地方に分布するパセマ式とがある。⁽¹²⁾

ここでは、ジャカルタ国立博物館に収蔵されているパリ・ブスキ式の 2 基の舟形石棺を紹介したい。

1 は、長さ 3.84m、幅 1.78m、高さ 1.38m を測る。側面形は舟形を呈して、上面に大きく反りがある。外面の短側面にはそれぞれ僅かな突出部がある。上面の縁部は、幅 15cm ほどで二段の段差を持ち、内側が高い。内面は、深さ 1.10cm ほどで、外面の平面形か隅丸方形なのに対し、内面は方形を呈する。隅には外面に通じる孔がある。東部ジャワのスラバヤ Surabaya 出土と言う。

2 は、長さ 4.02m、幅 1.98m、高さ 1.55m を測る。側面形は舟形を呈して、上面大きく反りがある。外面の短側面には、顕著な稜が垂直に走る。上面の縁部は、幅 28cm ほどで平坦である。平面図は橢円形で、内面も相似的な形状を示し丸底ぎみである。外面に通じる孔が 1 か所ある。片側の長側面には、 $1.0 \times 0.55\text{m}$ ほどの長方形の浮き出た部分があり、3 段に分けて古代ジャワ文字の陰刻文がある。東部ジャワのモジョクルト Mojokerto 出土とされる。

この両者は、スヨノ R.P.Soejono の分類によれば、中形で繩掛装飾突起のない第 V 型式（チャチャン Cacang 式）に該当する。2 は、碑文の存在より、AD 4 世紀以降の古代のものである。

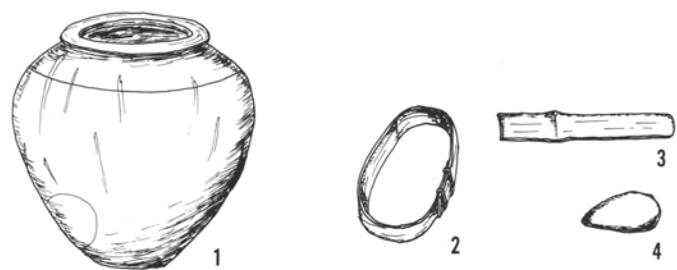


第10図 東部ジャワ出土の舟形石棺 S = 1 / 60

(12) ここで紹介したものは、共にブスキ地方の西になる東部ジャワのプランタス川下流域出土とされるものである。両種の区分は筆者の見解である。(坂井 1985a) (13) スヨノの分類は、写真・実測図を載せる Soejono 1977 で 3 分類され、Soejono 1984 では 6 分類になっている。しかし残念ながら両者共にチャチャン式の実測図を載せていない。

III. サダン・グントンの土器作り

回転台使用直前の技法による西部ジャワのサダン・グントン Sadang Gントン の土器製作は、すでに報告されているが、ここでは、筆者の実見の印象を記したい。



第11図 サダン・グントン製作の土器と調整具 1 S = 1/12 2 ~ 4 S = 1/6



① 左の椰子林がサダン・グントン部落。ガルッ Garut 高原中で冷涼多雨な気候。



② 中央の籠の中にあるのが成形板。左が竹製の調整具（第11図—2・3）。右は混和済の砂。



③ 瓈瑯の皿の上に成形板を置き、上で粘土塊より成形。（以前は2枚の成形板を重ねる。）



④ 粘土塊を次々に足して指で伸ばし底部原形ができる。成形板は瓈瑯皿の上で回わる。

(14) Nies 1976 及び Soejono 1977 による観察報告とともに、「ジャワ島西部チャンクアンの土器作り」として、筆者は紹介したことがある。(坂井 1984a)しかし文字報告のみによる筆者の紹介の中には、今回の実見によりいくつかの誤りがあることが分かった。従って先の紹介は、今回の記録で訂正したい。



⑤ 10分程度で口縁まで積み上げてしまう。もちろん右の乾燥中のものと比べて形が異なる。



⑥ 内側に指をあてながら、3の竹ペラを使って器壁の厚さを均一に削る。



⑦ 筒状の口縁原形はつぶす感じで平らにして行く。さらに内外面を削って器形を整える。



⑧ 成形板に載せたまま1次乾燥を1時間ほど行う。場所は屋内・屋外どちらでも良い。



⑨ 最終調整に入って生乾きの外面を、3の竹ペラで再度削りこんで行く。かき上げる感じ。



⑩ 水をつけながら4の小石を使って、外面を磨く。3の竹ペラでも粗い磨きは行う。



⑪ 成形板から離して、底部を削って薄くする。⑫ 唯一の装飾として、肩部に凸帯を貼り付けすでに重さを支えるほど口縁も乾燥している。　る。この時も成形板は土器とともに回わる。



⑬ 内面の調整は、かかえながら 2 の環状の竹ペラで削る。

⑭ 2 次乾燥。屋外で 1 日、屋内なら 2 日を要する。余裕のある人は、乾燥小屋を持っている。



⑮ 窯。傾斜面にあり窓窓状に見えるが天上部　⑯ 完成品。仲買人が買い付けに来る。この部はない。燃料はバナナの葉、焼成時間は 1 時間。落では大半の家で土器を作るが、窯の数は少ない。

VI.まとめにかえて

以上今回の簡単な調査の成果より、今後の問題点をまとめてみる。

実見した土器資料は、それぞれの土器文化を全て網羅したものではなく、観察時間も決して充分ではなかったが、その範囲内では大よそ次のような印象を持った。

施文方法や焼成の状態より最も古い要素を感じたのは、カルムパンの酸化の土器片（第2図-1）である。胎土も來雜物が多く、他の全ての実見資料より粗製である。筆者の知る限りでは、さらに古い印象を受ける竹管文・三角形押型文によって施文された土器片が、プラワンガンで出土している。⁽¹⁵⁾新石器文化に含まれるが絶対年代の下るカルムパンに対し、プラワンガンのそれらの有文土器片（筆者未実見）は、ここで紹介した同遺跡無文土器（第7図）と同一の文化に属さないならば、かなり実年代も遡る、と感じられる。

初期金属器時代では、ギリマヌッ・ムロロ・アニヤル・プラワンガン・チパリ・ティビンティンギ・リアンプアの各資料は、共通して回転台成形で研磨塗彩調整を行っている。これらは多くが埋葬遺構の副葬品であるため精製された土器が多いのかもしれないが、インドネシアのこの時代の貯蔵器あるいは明器的な儀器の一般的あり方を示しているように思える。少くともムロロの一群の土器が、上記カルムパンの古式のものと同一時代の産とは、考えにくい。これらの中で、ムロロとティビンティンギの壺は、距離的に離れているにもかかわらず、文化的にはかなりの親近関係を感じさせる。なおムロロ・リアンプアそしてギリマヌッの間に位置するロムボッ Lombok 島のグン・ピリン Gunung Piring 配石墓遺跡からの出土土器も、同一の文脈の中で考えられる。

一方、叩キ成形の煮沸器が、ブニ・東部ジャワ・ギリマヌッに見られる。ブニのものと後二者は調整方法をやや異にするが、現在のところ初期金属器時代の一般的な煮沸器の技法として理解したい。ブニの土器群は一括資料ではないので大きく問題は残るが、回転台研磨の壺（第3図-1）も含まれており、叩キ成形と回転台成形とを同時代の地域的な技法上の差異とはし難い。

しかしそれでは、一般論としてある手づくね→叩キ→回転台という成形技法の変化が、編年的な要素としてどの程度有効な法則であるかと言えば、これまた容易なことではない。隔絶地である上記カルムパンの古式土器の絶対年代の問題や、交通の発達したジャワ島の大都市バンドゥン Bandung 近くのサダン・グンドンで今日なお行われている回転台未使用の土器製作例を見れば、インドネシアのような地域差が激しく重層的な文化構造の歴史過程を持つところでは、編年作業の困難さをさらに感じざるをえない。今後の層位学的な調査と年代決定資料の発見に期したい。

年代の点では、今回実見した碑文を持つ舟形石棺とヒンドゥ・仏教文化の要素を含むトルジャンの配石墓遺跡は、上限を少くとも紀元後4世紀におけるために重要である。そのような古代遺跡の出土土器を一つの基準として、先史時代の土器を考えるのも有効な方法であろう。

(15) Haris 1981 で報告され、筆者は実測図の一部を紹介したことがある。（坂井 1985 b）なお中部ジャワの南海岸丘陵地帯のデン・オムボ Den Ombo 遺跡出土資料に竹管・爪形文状の施文土器片があるが、実測図が不良のため判断に窮する。（Goenadi 1984）(16) ドンソン Dongson 文化的年代にもよるが、ギリマヌッの年代も含めて西暦紀元前後から4世紀頃の年代。

参 考 文 献

- 略 称 AP: Asian Perspectives
 BARI: Bulletin of the Archaeological Institute of the Republic of Indonesia
 BPA: Berita Penelitian Arkeologi
 PPAN: Pusat Penelitian Arkeologi Nasional
 PPPPN: Pusat Penelitian Purbakala dan Peninggalan Nasional
 SNI: Sejarah Nasional Indonesia
 VKI: Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land-en Volkenkunde
 Budi Santosa Aziz 1984 : Laporan Survei di Flores dan Timor, Nusatenggara Timur, BPA 29, PPAN. Jakarta
 Goenadi Nitihaminoto 1984: Decorated Pottery from the South Coast of Java between Pacitan and Cilacap. PPAN-1984, Jakarta
 Haris Sukendar 1981: Laporan Penelitian Terjan dan Plawangan I, II, BPA 27, PPAN, Jakarta
 Haris Sukendar 1982: Laporan Survei Pandeglang dan Ekskavasi Anyar 1979, BPA 28, PPAN, Jakarta
 Heekeven, H.R. van 1956: The Urn Cemetery at Melolo, East Sumba, BARI 3, Jakarta
 Heekeven, H.R. van 1972: The Stone Age of Indonesia, VKI 61, Martinus Nijhoff, The Hague
 Nies Anggraeni 1976: Peninggalan-peninggalan Prasejarah di sekitar Danau Cangkuang (Leles), Kalpataru 2, PPPPN, Jakarta
 PPAN 1983: "Rapat Evaluasi Hasil Penelitian Arkeologi I", Jakarta
 PPAN 1984: "Studies on Ceramics", Jakarta
 Santoso Sugondho 1983: Hasil Penerapan Metode Analisis Gerabah dalam Penelitian Arkeologi di Indonesia, PPAN-1983, Jakarta
 Santoso Sugondho 1984: The Classification of Pottery from Gilimanuk, Bali, PPAN-1984, Jakarta
 Soejono, R.P. 1962: Indonesia (regional report), AP 5
 Soejono, R.P. 1963: Indonesia (regional report), AP 6
 Soejono, R.P. 1977: Sarkofagus Bali dan Nekropolis Gilimanuk, PPPPN, Jakarta
 Soejono, R.P. 1984 (ed.): Jaman Prasejarah di Indonesia, SNI I, Balai Pustaka, Jakarta
 Sutayasa, I. Md. 1972: Notes on the Buni Pottery Complex, North-West Java, Mankind 8
 Teguh Asmar 1982: Peti-Kubur Batu Kuningan, Pertemuan Ilmiah Arkeologi Ke-II, PPAN, Jakarta
 金 乘模 1980 : 「本州島の巨石文化」、『韓国考古学報』 8
 坂井 隆 1984 : 「インドネシアにおける最近の土器作り調査例」、『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』 1
 坂井 隆 1985a : 「カラムバと甕棺」、『東南アジア 歴史と文化』 14、東南アジア史学会、平凡社
 坂井 隆 1985b : 「インドネシア先史時代墓制研究序説」、『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』 2

資 料 収 藏 範 所

| 略 称 | MN : ジャカルタ国立博物館 | P P A N : 国立考古学研究センター |
|---------|------------------------------|---------------------------|
| 第 2 図—1 | MN 1506 Kalumpang | 第 3 図—10 MN 1942 Blitar |
| —2 | MN 1506/65—〃— | —11 MN 2055 Kediri |
| —3 | MN 1506 —〃— | —12 MN 1997 Blitar |
| —4 | MN 1506 —〃— | 第 4 図—1 P P A N Gilimanuk |
| —5 | MN 1715 Pangkajene | —2 P P A N —〃— |
| —6 | MN 1715 —〃— | 第 5 図—1 MN 1948 Melolo |
| 第 3 図—1 | P P A N PB03224 Cimaja | —2 MN 1950 —〃— |
| —2 | MN 2064 Buni | —3 MN 1947 —〃— |
| —3 | MN 6662 Buni | —4 MN 5874 —〃— |
| —4 | P P A N PB0230 Rengasdenklok | —5 MN 1943 —〃— |
| —5 | P P A N —〃— | 第 6 図—1 MN 6225 Anyar |
| —6 | P P A N Babakanpedes | —2 MN 6226 —〃— |
| —7 | P P A N Buni | —3 MN 6223 —〃— |
| —8 | P P A N Babakanpedes | —4 MN 6224 —〃— |
| —9 | P P A N Babakanpedes | 第 7 図—1 P P A N Plawangan |

第7図—2 P PAN Plawangan
第8図—1 Cipari 遺跡資料館
—2 ——
第9図—1 MN4486 Tebingtinggi

第9図—2 P PAN Liang Bua
第10図—1 MN D193-392K Surabaya
—2 MN D192-392G Mojokerto

今回の調査行にあっては、ジャカルタ国立博物館のトゥグー・アスマル Teguh Asmar 館長と国立考古学研究センターのスヨノ R.P.Soejono 所長の全面的なご援助とご好意を賜わった。ここに感謝の意を呈する。また両機関の各研究員の方々及び K.N. Otsudo, M.M. Shirakawa, I.Kanayama, Siauphing, Saini K.M. 各氏より少なからぬご協力とお世話を頂いた。併せてお礼を述べたい。

(本調査は、昭和60年度の文部省科学研究費補助金奨励研究（B）の対象研究である。)

Isi Singkat

Gerabah dan Kuburan Batu —Catatan Kunjungan Penelitian Indoneaia—

oleh:Sakai T

Pada waktu 25 Agu. s/d 14 Sep.1985 saya mengunjungi beberapa tempat di Indoneaia dengan bertujuan penyaksian gerabah-gerabah yang terkenal dan situs-situs kuburan batu prasejarah.

Dalam kesempatan itu saya dapat meneliti dan mengambil photo benda-benda tsb. sebagai data-data supaya akan dipergunakan untuk penelitian saya mengenai masarah, pergaulan cara kuburan prasejarah Indonesia antara Jepang.

Walaupun waktu penyaksianya sangat terbatas, namun didalam perbatasan ini, disini saya ingin mencatat beberapa hal perhatian.

1. Dari segi cara perhiasan (batang bambu) dan pembakaran (suhu-rendah), sebagian kereweng Kalumpang disangka dipakai teknik perbuatan yang sederhana. Dan diatas gambar dari laporan saja, mungkin didalam kereweng Plawangan termasuk yang lebih sederhana. Pada umumnya teknik itu dapat dibenarkan sebagai teknik zaman Neolitik.
2. Gerabah-gerabah bekal-kubur dari beberapa situs (Melolo, Anyar dll.) zaman Logam-muda biasanya dibuat dengan teknik loda lambat, pengupaman dan pemberian warna. Sedangkan gerabah-gerabah dari tradisi Buni dan Jawa Timur dipakai teknik pembentukan tatap dan batu. Tetapi kedua-duanya didalam data-data sekarang masih tidak dapat dianggap sebagai tradisi gerabah yang tersendiri. Sebabnya jenis bentuknya tidak dicocokan diatas ilmu klasifikasi. Yaitu, gerabah Melolo dll. ialah berbentuk wadah simpanan atau khusus upacara, sedangkan gerabah Buni dll. ialah berbentuk wadah masakan. Tentang masarah ini, saya merasa bahwa kebudayaan gerabah Gilimanuk yang mempunyai wadah simpanan dari teknik pengupaman-pewarnaan dan wadah masakan dari teknik tatap-batu adalah peranan yang sangat penting.

Dengan pandangan sementara demikian, agar meneliti kronologis dan perbedaan tradisi gerabah, maka saya ingin merasa diperlunya analisanya secara stratigrafis dan klasifikasi yang lebih dalam.

Pada akhirnya, saya mengucapkan banyak terima-kasih atas bantuan besar bagi penelitian saya ini kepada:

Bapak Tegah Asmar, Kepala Museum Nasional, Jakarta
Bapak R.P. Soejono, Kepala Pusat Penelitian Arkeologi Nasional, Jakarta dan
para Bapak & Ibu bawahannya serta
para Bapak & Ibu yang selain itu.